

西日本正教

西日本主教教区 宗務局

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

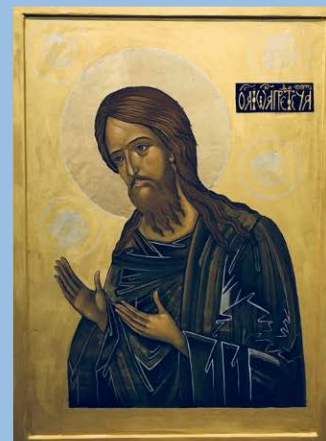
京都ハリストス正教会 内

電話・FAX (075) 231-2453

郵便振替口座 01030-5-18547

No.143
Spring,2018

「魅惑の正教イコン展」



～内容～

冬季セミナー、イコン展

教会代表者懇談会

グリゴリイ伊藤師『キリスト教のシンボル』

教区センター、各教会ニュース その他

西日本主教教区 冬季セミナー

イコンと「芸術の出会い」



2018年2月12日(金) 会場 西日本教区センター

京都教会主催 魅惑の正教イコン展

2月7日(水)～10日(土)

講演会

一二日(月祝)午後、「イコンと芸術の出会い」をテーマに東北学院大学教授のサワ鐸木道剛先生が講演されました、教区主催。

西欧絵画、ラファエロ、ダ・ヴィンチ、ミケンジェロらの絵が正教会に与えた影響、ロシアや日本がいかに西欧風イコンの影響を受けたのか、ジョージア(グルジア)、セルビア等の不思議な？ イコンなどに言及。講演会場には、先週のイコン展の作品がそのまま展示されていました。ロシア、ギリシャのイコンの他、ジョージア(グルジア)、セルビア、日本のイコン等の展示、あるいはテンペラ、油彩、アクリル絵の具、織物など多彩・多様なイコンが飾られており、質疑応答も多岐にわたりました。出席四七人。



イコン展

二月七日（水）～一〇日（土）京都の西日本教区センターにおいて、「魅惑の正教イコン展」を開催しました。主催、京都ハリストス正教会。

豊橋正教会秘蔵の「すべての悲しむ者に喜びを恵まれる生神女」はじめ、名古屋正教会の名古屋グランパス元監督ストイコビッチ兄寄贈の聖母子イコン等八点、神戸聖堂の成聖式の時に京都から寄贈された奇蹟者聖ニコライのイコンの「里帰り」、大阪の松島師から貴重なイコン二点、サワ鐔木道剛先生所蔵のセルビアのイコン等三点、エウゲニア白石孝子先生の多数のイコン、そして京都正教会所蔵のふだんは公開されていないイコンなど、全部で六八点の聖像がせいぞろい。じつに美麗・壮観でした。

ロシア・ビザンティン風から西欧絵画風イコンなど多種多様

であり、木の板、キャンバス、陶板（セラミック）、金属板、毛織物、西陣織などいろいろな材質。また救世主、聖母子や生神女、聖人、教会祭日など、さまざまなテーマのイコンを展示、会期中の観衆は二二五人を数えました。

今回のイコン展、講演会では、各教会、神父様がた、信徒の皆様の絶大なる御協力を受けました。朝日新聞がイコン展を記事にして下さったほか、主要紙が情報欄・行事案内に予定を掲載してくださいなど、とてもありがたい後援がありました。お世話になった皆様に深く感謝申し上げます。（パウエル及川）





福岡伝道所のセルギイ市来知幸兄のまとめたものをご紹介します。

序

各教会は独自に神父様の牧会・奉神礼等に従い、課題などはあるものの、順調に信徒との関係を保っているのが現状である。過日、西日本の教区の代表者が集まり、意見交換を行った。

一 目的

教区内の各教会の代表者が一堂に会し、お互いの現状を語り合い、相互の理解を深めることにより、教区・教会活動のなお一層の充実・発展を図ることを目的とする。

二 日時

一七年十月九日（月祝）午後

三 場所

京都 西日本教区センター

四 出席者

豊橋一名、名古屋・伊藤神父様以下四名、京都・及川神父様以下三名、大阪・松島神父様以下四名、広島一名、神戸・後藤神父様以下三名、四国・小川卓神父様以下二名、九州・杉村神父様以下四名

五 懇談会・意見交換内容

まず、代表者の自己紹介を各教会ごとに簡単に行った。次に各教会の問題点を含め現状などを述べてもらい、主要なもの、印象に残ったもの、問題点などを次の通りまとめた。

1、各教会の現状と問題点

・ 祈祷は英語等でも執り行っているが、日本語との違いが大きい。
・ 参拝者の約半数は外国人信徒で子供も多い（名古屋）
・ 高齢化が進み、聖堂の仕事の代わり手が少ない。現役の若い人は教会に来ない。外国人は増える可

能性がある（京都）

・ 高齢化にどう対応すればいいのか、ちらほらと若い人は入るが出席率は低い、バザーなどでは手が不足する（大阪）

・ 高齢化は進んでいるが婦人会はパワフルで食事会や旅行等あり楽しい（大阪）

・ 年一回の勉強会などがあり、希望に燃えている（広島）

・ 神父様不在の時もあったが今は持ち直した。高齢化などにより信徒数が減少、現役の人は来られない。どうしたらいいか。神父様が来られてから来る人もある。このチャンスはどう活かしたらいいのか分からない。何か道がないか（神戸）

・ 三家族で六人だが、家族的で絆が強い。力いっぱい聖歌を歌っている。高齢の方が参拝できない時どうするか（高松）

・ 徳島には唯一の聖堂があるが交通機関がない。二〇人ほど見える

ことがあるが、半分はアイコンを美術品としてみにくるだけ。高齢化が進み若者は外に出る（徳島）

- ・ 高齢化が進み参拝者は少なくな



っている。人吉は九州の中心。管区が広いので神父様の負担が重く感じられる。敷地が広く草刈りにはシルバー人材に依頼。広い敷地の有効利用はないか。奉神札が難

しいという人がいる（人吉）

- ・ 一〇家族くらいおり毎回の聖体礼儀に一〇人前後集まる。一人の超高齢者の処遇（出向きを家庭祈祷に）を考えている。駐車場がない、除草に手がかかることが欠点。外国人が三〜四家族参拝。全体的に若いので高齢化は当分問題外（福岡）

- ・ 高齢化が進んでいる。信者はいるが参拝するまでには至らない。「薩露交流会」の人が訪問され、アイコンを持参した。正教会の宣伝が必要と思う（鹿児島）

ひと通りの状況を話してもらった後、休憩をとり次にテーマごとに懇談。

2、テーマごとの懇談

か ◎宣教をどのようにしたらいい

- ・ 仕事をしている社会人は大勢居り、心理的な軋轢、救いを求める人もいる。その人を対象に宣教を

行っっては（福岡）

- ・ 高齢者の人だけでなく、家族中心、子、孫に伝えるようにすべき（大阪）
- ・ 高齢者は皆、生きがいとして参拝。この方々が次世代に伝えるように（四国）

- ・ 居場所を求めて来られる人と、時代が違うのか若い人は参拝しない。洗礼に無関心なのか。ご聖体というプレッシャーがあると云われた人もいる。自ら教会に行くことが先なのに、教会から引っ張って貰えると理解しているのかも。幼児から教会に連れていくように。イベントをすると楽しいことが記憶に残るので教会が好きになる。プロ並みの幼稚園の先生がほ

- ・ 働いている人は日曜日は休みと考えているが、今日はどこ行くのと聞かれて教会に行くと言うとエライと言われた。リフレッシュを分かってもらえない。大齋時の弁

当の中身を通じて、宗教について話すキツカケが必要かも（名古屋）

- ・復活大祭、主の降誕祭だけでも全員参加の呼びかけ運動をし、機会を増やし機会を作ることが大事だ（人吉）

- ・明るいムード作り、雰囲気作りが大事かも。外国の教会に行つて来たが、例えば韓国では記憶日にケーキでお祝いする。これは大事なことと思つた（福岡）

- ・ある写真に感動した。正教時報に載せたら。知らない若い人が多い。会報を英語で作っている（？）。

提案として存命者リストを作つてはどうだろうか。神のご加護を！！（名古屋）

◎聖体礼儀後の解散の状況について

- ・執事長が音頭を取り、聖体礼儀後は記念写真を撮ってから解散している。せつかく一カ月ぶりに集まったのに話もしないで別れることでもいいのだろうか。ほかの教会

はどうしているのか（福岡）

- ・高松では病院の院長宅で寿司を食べながら二く三時間懇談をしている。和歌山では伝道所宅でコンビニの弁当で食事していたが、今は食事なしで懇談をして終わっている。掃除は神父がしている。高齢者が多いので仕方なし（四国）



六 まとめ

各教会の現状と問題点などを話し合ったが、共通に言えることは高齢者が多くなってきた。参拝されている方々は問題なしといえども、新しく入ってくる人が少ない。宣教をどうするか、に尽きるところと思われる。各教会それぞれの事情で、それぞれのやり方で頑張つておられる。各教会からの提案を生かし、「みんなでいまできることをやろう、そのための懇談会なのだから」とまとめられた。

七 所感

今回二回目の懇談会であったが、各教会の様子が分かり、取り纏めのご指示を与えてくださったため、神経を研ぎ、できる限り記録したので、まとめが出来、有益であった。福岡伝道所の発展の為、ヒントやアドバイスを十分に生かしていきたい。

キリスト教のシンボル

(象徴)

司祭グリゴリイ伊藤慶郎

いずれの宗教も太古から現代に至るまで、ある一定の意味を含んだシンボルを用いている。キリスト教においてもさまざまなシンボルが用いられるが、本稿ではそのうちの代表的なものをいくつか取り上げて解説してみたい。

一 十字架

十字架はキリスト教におけるもっとも重要な宗教的シンボルであり、正教会のみならず西方教会（カトリック、プロテスタント、聖公会）を含むほとんどのキリスト教諸派が用いている。その理由は、十字架はイイススが磔刑によって処刑された刑具であり、ハリストスのシンボルと見なされるためである。十字架はハリストスの受難

の象徴また死に対する勝利のしるし、さらには復活の象徴なのである。

一 一 八端十字架

日本正教会においてもっとも普及している十字架であり、ロシア教会やブルガリア教会などスラヴ系の正教会でも頻繁に用いられている。したがってこの十字架こそ正教会の十字架と誤解されやすいが、ギリシャ教会などギリシャ系の教会ではほとんど用いられることはない。

日本正教会において



八端十字架は三本の横棒があるが、一番上は罪状書き（「ユダヤ人の王・ナザレ人イイスス」と書かれた札）を表している。下の横棒は足台であるが、棒の左が下げられ、棒の右側が上げられた形になっている。これはハリストスから見て右側の盗賊は、イイススを救世主と認めて楽園を約束され、左側の盗賊はイイススをのし

り、地獄に落ちたことを表している。

一 一 二 ギリシャ十字

ギリシャ系の正教会で最も頻繁に用いられる十字であるが、西方教会でもラテン十字と並んで広く用いられる。その形は、横棒と縦棒が同じ長さで構成され、横棒と軸棒は中央で交差している。スイスの国旗や赤十字など種々の紋章にも用いられている。



一 一 三 ラテン十字

縦長に構成され、横



棒が縦棒のやや上方に付けられている。ラテン十字は主に西方教会で用いられることから「ラテン十字」という名称となっている、正教会でも用いられる。その起源は古代にまで遡り、コンスタンティヌス大帝の時代には聖堂もこの十字架の形によって建設されていたし、モノグラム（後述）の中に

も取り入れられるように他のシンボルの中にも見いだすことができ

二・モノグラム

「モノグラム」とはギリシヤ語であるが、「モノ」とは「一つ」、「グラム」



は「文字」という意味である。すなわち二つまたは三つの文字を一つに重ねて、別の意味合いを持たせるものである。古代より多数のモノグラムが存在したが、もっとも有名なのは「ラバウム」と呼ばれるモノグラムである。このモノグラムはイイスス・ハリストスの最初の頭文字「X」と「P」を合わせたものである。これは又の名を「コンスタンティヌスのモノグラム」と呼ばれるが、それは故事がある。三一三年、コンスタンティヌスはマクセテンティウスとローマ近郊で戦って勝利したが、戦いの前にこのモノグラムの

空に（または夢に）見たという。その後、コンスタンティヌスはこれをローマ帝国軍の旗印とした。

三・羊または羊飼

羊はハリストスの象徴として用いられてきた。旧約の過ぎ越しの羊は、新約のハリストスを象っているという。またイサイヤ書にある傷なき羊の苦しみは、罪なきハリストスの苦しみとして解される。

羊はキリスト教またはキリスト教徒の象徴でもある（イオアン伝十章）。ハリストスがペトルに言った言葉「爾我が子羊を牧せよ」（イオアン伝二十一章十七節）からも羊がキリスト教徒の象徴となっていることがわかる。イタリア・ラベンナにあるガッラ・プラキディア廟堂のモザイク



を見てみよう。ここには十字架を持つ羊飼いと羊の群れが描かれているが、羊飼いがハリストスであることは言うまでもない。イオアン伝には「我は良き牧者なり」というハリストス自身の言葉があるように、このモザイクは善き牧者としてのハリストスが羊である信徒を導いていることが表されている。

四・魚

魚は古代エジプトやシリアでも聖なるものの象徴として用いられてきたが、キリスト教においても同様に聖なるものとなった。それは特にギリシヤ語の綴りにある。ギリシヤ語で魚のことを「ΙΧΘΥΣ」と書くが、これは「イイスス・ハリストス・神の子・救世主」の頭文字になるのである。つまりギリシヤ語で表すと、「Ιησους Χρισ



τ ο ς θ ε ο υ γ λ ο ς σ ω τ η ρ となる。だから信徒は「X Θ Υ Σ」という言葉の形からハリストスを思い浮かべたのであった。

五・船

船はシンボルとして教会を表している。かつてノアが箱舟に乗って洪水より救われたということ、は、私たち信徒も世の中の荒波から逃れて、港すなわち天国に着くことができるということを示している。

六・鳩

鳩がオリーブの枝をくわえて、ノアの箱舟にもどってきたことから、ノア達は洪水の水が引いたことを悟った。このことから鳩もまたキリスト教におけるシンボルとなった。またハリストスの洗礼において天から聖神が鳩の形を取って現れたとあるように、鳩は神聖

神の象徴である。

七・錨

錨も古代ペルシャやギリシャでもシンボルとして機能していたが、キリスト教におけるシンボルの意味は「希望」である。錨なくして船は危険にさらされ、船の運命は錨に依っている。聖使徒パウエルも次のように言っている。「望みは我等の霊のために堅くして動かざる錨のごとし」（エウレイ書六章十九節）。
実に希望はキリスト教徒の錨である。私たちの人生は荒れ狂う海上を航海するようなものである。荒れ狂う波は心の誘惑であり、外からの迫害である。しかし私たち正教徒は誘惑にあっても、迫害にあっても、希望を捨てることはない。なぜならば私たちに確固たる錨であるハリストスがあるからである。

八・棕櫚の枝

棕櫚の枝は聖枝祭で用いられるが、これはユダヤ人において勝利のしるしであった。イイススがエルサレムに入城した時に、ユダヤ人達は棕櫚の枝を振って万歳を唱えたという。これはイイススを「政治的な」勝利者として歓呼したものであるが、そうではないと悟ると一転して、大衆は「十字架に釘せよ」と叫んだのであった。イイススは十字架に釘せられたが、三日後に復活し、死に対する「勝利者」となったのである。

以上、紙面の都合もあって代表的なシンボルに限らざるを得なかったが、キリスト教においても、そこにあるもの以上の意味を表すものとしてさまざまな象徴が取り入れられてきたのである。その意味を改めて思い浮かべながら、教会に満ち溢れているシンボルを見してみよう。



講演会
「生神女マリアとわたしたち」

九月一八日（月祝）一三〜一五時、講師のゲオルギイ松島雄一師（大阪）が、生神女（テオトコス、神を生んだ女性）の神学的位置づけを、初代教会の聖イリネイ（エイレナイオス）まで遡り講話。しばしばカトリックや新教にも言及。あらゆる信徒の信仰生活の偉大なる模範者である生神女について詳述した。カリストス・ウエア主教著『正教会入門』新教出版社を紹介。出席二四人。



講演会
「ロシアにおける正教会と宗教的多様性」

十一月二三日（木祝）一三〜一五時、講師の有宗昌子先生（同志社大非常勤講師）が、映写される正教会をはじめとするロシアで普及している他の宗教について紹介。特に興味深かったのが学校で



の宗教教育。小学校では選択制なのだが教育指導できる教師の数が限られており、どうしても正教会を選択する生徒が多いことなどを、教科書を見せながら講述。とても勉強になった。出席二三人。



年越しコンサート

一二月三一日（日）一四時半
 一五時半に開催。開演前に約
 一〇分、関西盲導犬協会のP R
 ビデオ上映。春のコンサートと
 同じフーリン・クロイトル氏
 （バイオリン）、陣門華子氏（ピ
 アノ）のすばらしい演奏、一〇



2017/12/31

曲。クラシックからアメリカ等の
 クリスマス曲も。会場みんなで手
 拍子、足踏みする楽しい曲も披露。
 雨まじりの不順の天気にもかかわ
 らず、親子連れ、ご近所・町内か
 らも多数の来場者が会場を満たし
 た、聴衆一〇九人。益金の一部を
 協賛・関西盲導犬協会へ寄贈。

外壁タイル修復工事

一一月末に、教区センター東西
 外壁タイルの剥離・亀裂等を発見。
 一二月に剥離の広い西側に足場
 と防護柵、年明けに東側にも同様
 の措置。

一二月二七日、施工した創真建
 設西山社長と伊原一級建築士、佐
 藤孝雄教区財務部長と及川局長が
 会談。完成時のタイルのまま修復
 工事に臨むこと、また今回の瑕疵
 については創真建設が全部請け負
 ったの修復工事となることを確認
 した。



2018/01/12



一月九日、連日、業者による高
 所作業車や梯子に登ったの打診検
 査、すぐに工事に取っかかりれるよ
 うにするための破損タイルを剥が
 す作業等が行われた。
 三月いっぱいには修復工事が終わ
 る予定である。

第一回 奉神礼基礎講座

八月十四日、十五日に大阪教会を会場に教区研修行事として開催。名古屋、京都、大阪、神戸の四教会から、両日共に二九名が参加し、ゲオルギイ松島神父から正教奉神礼の神学、マリア松島姉からそのなりたちの歴史と晩課の仕組みを学びました。実習では、大阪聖歌隊指揮者マリナ竹中姉の発声練習に続き、経験の程度によってグループ分けし、ニコライ松田輔祭から誦経指導を受け、聖歌グループはステイヒラを祈祷文を見ながら四調で歌う練習をしました。二日目には広い聖堂で誦経を全員が体験しました。

両日ともにプログラム終了後に平日晩課、二日目は早朝七時から聖体礼儀に参加し、交替で誦経奉仕、聖歌奉仕をしました。

教区として初めての試みという



こともあって、準備が大変でしたが、大阪教会婦人会の有志が食事準備をご奉仕くださり、参加者は研修に集中することができました。教会に宿泊で参加された方も名がありました。朝食、片付けなどは参加者全員で行い、小さな修養会の体験ともなりました。(松島)

各教会 ニュース

広島 講演会と聖体礼儀

十一月二三日(祝)は広島地区集会。昨年の同日、今年の五月三日に続き、広島での聖体礼儀も三回目となりました。会場は広島市中心部にある袋町学区会館です。今回は十三名の方が参加され、信徒全員が領聖しました。新たに参加されたご一家もあり、ウクライナ出身の奥さまは、「リトウルギア(聖体礼儀)で心がワクワクしました。生きていると感じました」と声を弾ませていました。

前日午後六時から、広島 YMCA の会議室を借りて、松島神父が正教会紹介の講演会を行いました。平日ということもあり、参加者は七名でしたが、うち四名の方は、市内のキリスト教会に送ったチラシ



や中国新
聞の宗教
欄での案
内を見て
参加され
ました。次
回、復活祭
聖体礼儀
は来年四
月三十日
の予定で
す。

なお、本企画はいつでも西日本
主教教区後援で行っています。皆
様の教区宣教献金がこのような宣
教行事を支えています。感謝！
(松島)

大阪教会 降誕祭記念講演会

十二月二二日(金)、土佐堀の
YMCA 会館で YMCA の講師会が定期
的に開いている学びの会「パスト
ラルアワー」に松島神父が招かれ、

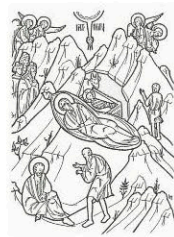
降誕祭記念講演会「なぜ神が人と
なったのか」が開催されました。
今年度当初より、大阪都心に打っ
て出て宣教講演を行う計画でした
ので、渡りに船でした。YMCA 関係
者、一般からの参加者、大阪教会
信徒、あわせて二九名の方があり、
熱心に聴講されました。聴講者か
らは「降誕」を「復活」で完成す



る神の救いの計画、神と人、すべ
ての被造物の和解への始まりとす
る正教の神学に新鮮な驚きを感じ
ましたとの感想をいただきました。
(松島)

九州管区

「降誕祭記念講演会」



二〇一七年一月二三日(土)
に福岡の東洋ホテル会議室に於い
て「聖伝を生きる」と題してワシ
リイ杉村神父による「降誕祭記念
講演会」が行われた。講演では最
初に正教徒にとって信仰生活の中
で聖伝や機密に与っていくことは
神の揺るぎない福音を経験し、神
の豊かな生命の息吹に参与してい
く道を歩むことであることが話さ
れた。

そして次に、「聖伝を生きる」
ことは神の呼びかけに対する人間
の応答であり、神との対話と関係
の深まりを意味している。そして

聖伝を通して神と人間（或いは被造物間）関係の親和、愛への変容が目標とされている事などが話された。

最後に全ての正教徒が聖伝や機密に与っていくことを通して神の生命・ pneuma と関わり、生の変容（真・善・聖）の歩みⅡ「愛」を実現していくよう導かれていることが強調された。講演会は前半に司祭が聖伝、機密に関わっていくことの尊さと意味について話し、後半では参加者が円形に座り、



全員で活発なディスカッションを行なった。参加者は四名と少数ではあったが、ディスカッションの時間も含め全体を通して充実した濃い時間が与えられた。（杉村）

大阪教会 バザー

台風が接近するなか、バザー委員会は規模縮小や時間短縮など知恵を絞り、最終的に開催に踏み切りました。雨に備えテントを張ったのに、前に暴風が予想されて取り外したり、屋外が使えないために内部の配置を変えたり、提供する食事のメニューや量を減らしたりと、例年にない心配事の多いバザーでした。当日は悪天候にもかかわらず、多くの方が奉仕に駆けつけてくださり、無事に終了できました。しめてみますと、予想以上の来場者があったようで、収益は例年の一割減程度にとどまりました。（松島）



名古屋教会 堂祭（神現祭）

名古屋教会では一月二日に二日繰り下げて神現祭をお祝いしました。聖体礼儀に引き続き、大聖水式を行いました。例年、聖水式は大寒の寒い日ですが、今年は穏やかでこの時期としては暖かい日でした。お祈りの後は、堂祭として恒例の餅つきをして、あんこ、きなこ、大根おろし、雑煮、ずんだ、のり等多くの味でつくたてのお餅を堪能しました。今年は境内地拡張に伴い、かまどを設置して、せいろで餅米を蒸し上げました。



今後の予定

◎第11回「アベルはなぜカインに殺されたのか」

日時 5月3日(木・祝)午後1時から3時 会場 西日本教区センター(京都正教会)

講師：長司祭パウエル及川信 会費：200円

旧約聖書「創世記」、人間の歴史最初の殺人事件、兄弟殺人から、正教会の教える真実の奉獻のあり方を探究します。



◎第3回奉神礼基礎講座

9月17日(敬老の日)に決定!

昨夏第1回を行った奉神礼基礎講座、3月21日に第2回を行いました。第3回は、第1回の際、お盆の時は休みにくいという声もありましたので、9月17日に予定しています。内容はこれから詰めてゆきますが、一日をフルに使っての講座・研修になります。参加希望の方は、早めに予定を入れておいて下さい。(教務部)

書籍の紹介

◎『神父になったサムライ』日本正教会の歴史 論考 西日本主教教区出版

長司祭パウエル及川信 著 単行本 約200頁 予定頒布献金1,000円

日本正教会初代司祭パウエル澤邊琢磨師の半生記など、教区学びの会等での講演原稿をもとに、聖人・聖堂建設・教育・魅力的な人物などを語ります。



◎『正教会入門-東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝』 新教出版社

ティモシー・ウェア著・長司祭ゲオルギイ松島雄一監訳 約400頁 価格4,000円

本書は1963年の初版以来、正教会への入門書として不動の地位を保ち続けてきました。エキュメニズム、 sacrament、自由意志、煉獄、また多様な正教会間の関係等、歴史から神学、実践まで、深く正確な解説がなされています。



◎『落ち込んだら 正教会司祭の処方箋171』 ヨベル

アントニー・M・コニアリス著・長司祭ゲオルギイ松島雄一訳 約300頁 価格1,600円

171のタイムリーな処方箋があなたの落ちこみを、希望への足がかりに変えてくれます。



◎「ロシア正教会の聖歌」ヨハン・ガードナー

試行版をすでに発刊いたしました。その後の見直しを経た決定版の原稿ができあがっています。正教会の聖歌の本質、奉神礼の構造、聖歌成立の歴史などにご関心のある方、また各教会で聖歌指揮、楽譜まとめなどに奉仕されている方には大変役に立つ世界的な名著です。発刊予定は現在未定ですが、発刊部数決定の参考にさせていただきたく購入にご関心のある方は、教務部(大阪、松島神父)まで、ご意向をお聞かせくださると、大変助かります。試行版は決定版出版の際に交換させていただきます。

全国神品研修会

1月31日(水)、2月1日(木)の二日間、ニコライ堂に全国の神品の方が集まり、全国神品研修会が開かれました。神品の「就業規則」や「教会の会計」についての研修が行われ、また、自治祝福50周年記念に向けての話し合いが行われました。

